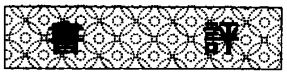

Michel Picard; and Robert E. Wood, eds. *Tourism, Ethnicity and the State in Asian and Pacific Societies*. University of Hawai'i Press, 1997, 259p.

観光は今日の文化のダイナミズムを論じるために欠かせない切り口になつつある。2000年には7億人に達するだろうといわれる国際観光量もさることながら，観光が今日——アルジュン・アパドゥライが「文化のグローバル・フロー」と呼んだ人，技術，カネ，情報，知識のグローバル化——のなかで文化の生成とおおきなかかわりをもっているからだ。

本書は，フランスのCNRS（国立科学研究センター）の人類学者で，インドネシア・バリの観光研究で顕著な業績をあげているミッシェル・ピカールとラトガース大学で社会学を教えるロバート・ウッドの編集した観光研究に関する論集である。人類学的視点からの観光研究の論集としては1977年に初版がでたヴァーレン・スミスの『ホストとゲスト——観光の人類学』以来いくつかのものが出ているが，アジア・太平洋地域に光を当てているのが本書の特徴である。この地域は，今日，観光の成長ゾーンで，世界の観光客量においてこの地域が占める割合は1970年の3％から1991年には11.5％に上昇しており，2000年までに18％に達するだろうといわれている。ちなみに，この地域を訪れる主要な観光客はほかならぬわたしたち日本人である。

本書には8篇の論文が収められている。第1章はRobert E. Woodによる"Tourism and the State: Ethnic Options and Constructions of Otherness"と題する論文で，本書の序論的位置を占めている。ウッドによると，国家と観光とエスニシティは互いに深くかかわっており，観光，国家，エスニシティの関係はきわめて動態的である。そして例えばマレーシアの国民文化とは，「マレーシア文化」として観光客に「売られる」ものを公式に抽象化したものにすぎないとさえ言えるという。そうした意味では，編者の一人ピカールが論じているように，「観光文化」(touristic culture) こそ，今日のこの地域の国民文化の形成にとって統合的部分であると言っても過言ではあるまい。このスタンス，観光をエスニシティや国家との関連で論じるスタンスが，本書の理論面での特徴である。

第2章以下は，事例研究である。第2章ではTimothy S. Oakesが中国貴州のエスニック・ツーリズムを，第3章ではLaurence Wai-Teng Leongがシンガポールのエスニシティの商品化を，第4章ではJoel S. Kahnがマレーシア・ペナンのジョージタウンの「文化化」を，第5章ではJean Michaudがタイ山地部モンの観光と「文化的抵抗」を，第6章ではKathleen M. Adamsがインドネシア・スラウェシのトラジャのエスニック・ツーリズムを，第7章ではMichel Picardがバリの文化観光を，最後の第8章ではJocelyn Linnekinが太平洋観光と文化的アイデンティティの商品化を論じている。

これらの論文はそれぞれに興味深い問題を提起している。が，そのすべての内容をここでたちいって紹介する余裕はない。ここではわたしが関心をもってきたインドネシアのケースについてのみ簡単に触れておく。インドネシアに関しては，今述べたように，アダムズがトラジャについて，ピカールがバリについて論じている。バリとトラジャの観光については，わたし自身これまで調査し，研究も発表しているので，とりわけ興味深く読んだ。

トラジャはスラウェシ山地にあってユニークな文化伝統をもつことで知られる。そこに観光開発が導入されたのは1970年代のはじめだが，その展開にともなう，平地の民，とくに州都ウジュン・パンダンのブギスとのエスニックな対立をアダムズは描いている。トラジャ観光のガイドをウジュン・パンダンの非トラジャ人（ブギス人や中国人）が行なうことをトラジャ側はウジュン・パンダンによる搾取だといらだち，逆にウジュン・パンダンの方ではトラジャ人ガイドはガイドとして洗練されていない，プロフェッショナルではないとみる。そしてトラジャ人がトラジャ観光の成功を自分たちのほこるべき遺産の証しとみる分だけ，ウジュン・パンダンの方はそれをドラジャによる観光の政治化だとみるのである。こうして観光開発

の展開がエスニックなライバル意識の顕在化につながるわけだ。

バリの観光と文化の関係について，ピカールはこれまで精力的に議論を展開してきた。この論考もこれまでの議論の延長上にあるが，とくにオランダ植民地期，およびインドネシア独立後とバリにおける観光と文化というテーマを歴史的に検討し，スケールの大きなパースペクティヴのなかで論じているのが本論の特徴である。こうした歴史のプロセスのなかで西洋人の視線のもとにバリが「バリ化」され，バリの慣習が問題となる場所は村から州のレヴェルに移り，さらに今日，バリの芸術は国民国家インドネシアの象徴とさえなっている。ピカールは，こうして，文化観光が国民文化と地域文化の形成とバリ人アイデンティティの創出につながるダイナミックな観光文化論を展開している。

この二つの論考は，本書のテーマであるアジア・太平洋地域において，観光，エスニシティ，国家の三すくみの関係を検討するうえで有益な事例となっている。すなわち，この地域において，観光開発は国家的プロジェクトとして展開され，エスニシティを再編成する機会となり，地域文化のダイナミズムを考えるうえで格好の枠組みを提供しているのである。

最後に，本書からは離れるが，わたしが最近（1998年３月）訪れる機会があった太平洋の小国パラオの観光のことに触れておく。1994年に独立したこの人口１万7,000人ばかりの小さな国は，「海の楽園」（世界有数の珊瑚礁とそこに群れる魚）を焦点とした観光を推進し，1997年には７万人をこえる観光客（約２万人の日本人，約３万人の台湾人，そして約１万人のアメリカ人など）が訪れている。問題は観光開発と自然環境のバランスである。私の滞在中，政府観光局が主催したワークショップでは「持続可能な観光」や「エコツーリズム」をめぐってホットな議論が展開されていた。さらに，観光関連の経済進出や労働市場の問題もある。というのも，日本や台湾から外資が導入され，ホテルやレストランといった観光セクターで働いているのは半分以上がフィリピン人など外国人労働者なのだ。

ここには，本書が検討している観光とエスニシティと国家という三すくみの関係をより大きくつつみこむ問題としてトランスナショナル，トランスリージナルな人やカネの移動がある。この事実は最初に述べた今日の「文化のグローバル・フロー」のなかで「地域」とはなにかということをあらためて考えさせる。観光はそうしたグローバルな移動の一つの形態として新しい地域研究にとっての重要な切り口の一つにもなりうるのである。

（山下晋司・東京大学大学院総合文化研究科）

Daniel Fineman. *A Special Relationship: The United States and Military Government in Thailand, 1947-1958.* University of Hawai'i Press, 1997, 357p.

本書はイエール大学に提出した1962年生まれの著者の歴史学の博士論文を出版したものであり，調査の行われた時期は1991～93年である。

近年タイの政治外交史を扱った英文の研究書の出版が相次いでいるが，それらの内容は玉石混淆である。関係公文書館・図書館での一次資料の徹底した調査や関係者へのインタビューを積み重ねたレイノルズの日本南進時の日タイ関係研究[1]や，アルドリッチの太平洋戦争までの米英タイの関係研究[2]のように良質の成果が産み出されている一方で，主にピブーン時代を扱ったストウ[3]やコープクア[4]の著作のように，中途半端な資料調査のままに出版し，理解よりも誤解を拡大させる虞が大きいものもある。その中にあって本書が前者に属することは疑問の余地がない。

1) Bruce Reynolds. *Thailand and Japan's Southern Advance, 1940-1945.* St.Martin's Press, 1994.
2) Richard J.Aldrich. *The Key to the South, Britain, the United States, and Thailand during the Approach of the Pacific War, 1929-1942.* Oxford Uni. Press, 1993.
3) Judith A. Stowe. *Siam Becomes Thailand: A Story of Intrigue.* University of Hawaii Press, 1991.
4) Kobkua Suwannathat-Pian. *Thailand's Durable Premier, Phibun through Three Decades 1932-1957.* Oxford Uni. Press, 1995.